オンライン・コミュニティにおける「学び」と「言語習得」

立命館大学院　言語教育情報研究科　言語情報コミュニケーション専攻　廣澤周一
gr027054@li.ritsumei.ac.jp

1. はじめに

近年、インターネット上ではさまざまな形での人と人とのコミュニケーションが行なわれている。ホームページという形での一方向的、静的な情報発信から、BLOG や WIKI さらには MIXI や gree に代表されるソーシャルネットワーキングでは、双方向で共時的、動的な交流が可能であり、ユーザーの興味に応じたコミュニケーションが行なわれている。とりわけ、異文化交流を目的としたコミュニティ・サイトも増加しており、そこでは言語学習そのものが目的ではなく、異文化理解やコミュニケーション、友達づくりや情報交換が目的であるが、実際のコミュニケーションの中で言語能力は向上していかないのであろうか？そういった疑問から、オープンソースである Moodle を用いたオンライン・コミュニティを構築し、オンライン上での「学びの場」のあり方と「言語習得」との関係について考察する。

2. Moodle とは

Moodle の特徴的要素をあげると、

(1)無償で配付されており、継続的に更新されている

オープンソースかつ、ユーザーの声を反映して継続的にバージョンアップされている。

(2)コンテンツの管理が容易かつコース設定が自由

CMS (Contents Management System)の概念に基づいて設計されており、ユーザーはオンラインで登録可能で、またユーザーがどれくらいの時間、どのような作業を行ったかの履歴を得ることができる。

(3)既存のサイトやデジタル資料との親和性が高い

Moodle 内に既存のホームページをリンクしたり、ワードやエクセル、パワーポイントなどのデータのアップロードが簡単に設定できる。

(4) 多言語対応である

UNICODE 対応であるため、文字コードの制約を受けずに同じフォーマット上で複数の言語が表示・利用できる。

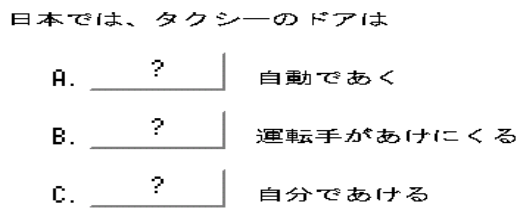
他にも特徴的な点は多々あるが、総合的に鑑み、Moodle を利用したオンライン・コミュニティを構築することとした。

3. 日韓異文化理解のためのポータルサイト

当初は、日本や日本文化に興味を持つ諸外国のユーザーと、諸外国の人々との交流を希望する日本人ユーザーとで、日本についてのトピックスを設定し文化理解度のクイズや掲示板や WIKI でのディスカッションなどのコンテンツを想定した。しかしながらその場合利用対象者が広く、また多言語を対象とした場合、データ分析も複雑となるため、第一段階として、日韓異文化理解のためのポータルサイトとして運営することにした。その理由としては、隣国であり、文化や言葉も非常に似ているといわれる韓国との文化比較を通じて、より日本／日本文化の特徴が浮かびあがり、かつ韓国／韓国文化や国民性が日本とどのような点で共通で、どのような点で異なっているかを知ることで、より日本について理解を深めることができると考えたからである。また今回はユーザーを２０代を中心とした若者に設定し、韓流ブームといわれる中で、お互いの国についてどれだけ知り、また誤った理解をしているかを考察することにした。特に音楽やファッション、スポーツ、映画・ドラマといったポップカルチャーを中心にしたトピックスを日本語、韓国語そして媒介語として英語を利用してコミュニケーションを行うこととする。

4. 学びと言語習得

ユーザーは、サイト内のコンテンツを閲覧したり、異文化理解のクイズにチャレンジしたり（図 1,2）



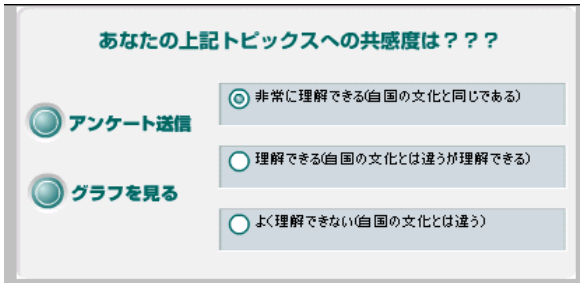


図１　web 上で選択肢を選び、送信すると

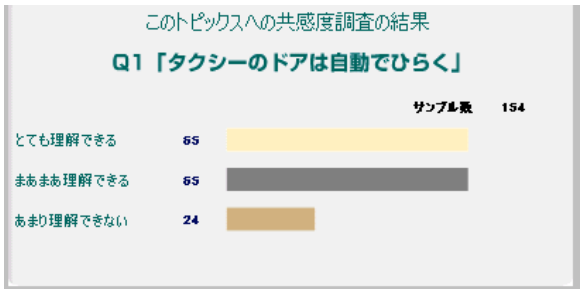


図２ リアルタイムで結果が反映され、視覚的に確認することができる

掲示板などでのコミュニケーションを通じて、自ら「学び」そして、他のユーザーへレスポンスすることによって「教える」さらに相互に「学び合う」という実践活動を行っていく。その際には当然「言葉の壁」が存在するが、オンライン・コミュニティでは、翻訳ツールを使ったり、音声や映像によるチャットを行うなどユーザー自身の工夫によって、乗り越えることができる。そこでは、言語習得ということを意識しない無意識な形で「学んで」いく過程が存在するであろう。そこで、実際のコミュニケーション活動の履歴をデータ収集していくことで、「学び」と「言語習得」の関係性について考察していきたいと思う。具体的には、それぞれの母語あるいは相手の母語を翻訳したデータと、媒介語となる英語を使ってコミュニケーションしたデータを集め、特徴的な点を分析していく。特に英語のデータからは、日本人、韓国人に特徴的な表現や使い方が現れる可能性があり、また調査初期のデータと後期のデータとの間にも、変化が出てくることが予想される。

5. むすび

現時点では、サイト構築の段階であり、実際の運用は 2006 年 9 月以降となる。現在、韓国の弘益大学と建陽大学の日本語専攻の学生に対して協力を要請しており、約三ヶ月月間にわたり、継続的に調査する予定である。ユーザーは、日本、韓国からそれぞれ１０名を予定している。ユーザーがコンテンツに対して魅力を感じることができなければ、利用機会も少なくなるであろうし、まったく利用しなくなるということも考えられる。したがってサイトのコーディネートという観点からも、常に情報を更新したり、ユーザーの声を反映した形での「動的」な対応が必要となってくるであろう。まだ始まったばかりであるが、これから継続的に調査をすすめ、オンライン・コミュニティにおける異文化理解と「学び」、そして「言語習得」の関係性について、より実践的な考察を行なっていく予定である。

参考サイト

[1]Moodle ホームページ
http://moodle.org/
[2]異文化を理解するための基礎知識
～文化共感度リサーチ～
http://tash.jp/sleis4/